

余談

たまたま今年の6月下旬に、30歳前のフランス人の若者と食事を一緒にした。

彼は、世界の各地を行脚していて、アメリカ人の女性と結婚し、今年の3月から来年の3月まで岐阜に在住する予定である。

岐阜グランドホテルの12階の展望レストランで食事をした。そのときの彼はその眺望のよさに見とれ、川を上る船を見ては質問を繰り返した。食事のあと、ほぼ午後8時となったので、ホテルを出て、新しく作られた川沿いの遊歩道に行き、鶺鴒を遊歩道から見物した。

彼の奥さんは妊婦さんで、安定期に入ったとはいえ、長い時間、夜風に当って体を冷やすことはよくないとの不安があり、私はなるべく早めにその鶺鴒見物を切り上げたかったので、最後まで鶺鴒を見続けることは出来なかった。それで、彼は何度となく振り返り、名残惜しそうに鶺鴒を見ていた。

この経験から感じたことは、次のことである。

- ①、鶺鴒は世界を行脚してきた若者にも十分訴えかけるものがあり、つまり国際競争力を持ちえるものであること。
- ②、料亭「美濃の壺」の前でも、鶺鴒を見るには、そのお店の僅かな明かりでも邪魔をするものであり、鶺鴒広場あたりが、明かりがないことから鶺鴒を見物するには大変よかったこと。

本文

1、私は、長良橋近辺の道路網の再整備は、大変成功しているのではないかとと思っている。

- ①、長良橋と岐阜公園との間に歩道のない区間があり、ずーっと大変危ないと感じていたが、今は綺麗に歩道が整備され、歩く者としては安全で快適となった。
- ②、長良橋から岐阜グランドホテルまでの道路が整備され、自動車が快適に走れるようになった。整備される前のこの道路は大変狭い道であり、この道を間違えて歩くと自動車が来ると逃げ道がなくなってしまうという危険があった。かつて、岐阜グランドホテルに宿泊している子ども連れの観光客が、何も知らずにその道を歩いていこうとするのを見て、「危険だから」と注意したことがある。

信じられないことだが、岐阜は、ずーっと長い間、観光客に快適性、安全性を確保してこなかったのである。

今回の整備により、この道は安全になり、この道から鶺鴒広場への自動車でのアクセスもよくなった。また、今まで車道となっていた川沿いの道は遊歩道となって、極めて快適な空間となった。

2、多目的ホール、イベント施設について

長良川沿いには「国際会議場」というイベントのできる施設がある。近くに世界イベン

ト村もある。その他イベントができる施設は数多くある。

また、長良川においては、花火大会、篝火能、喜多郎コンサート等、大規模なイベントが川原で毎年開かれている。そのような現状で、さらにそれ以外に立派なイベント施設が必要なのだろうか。創るに越したことはないのかもしれないが、投資対効果を考えると疑問である。

3、「ながら足湯」について

足湯そのものは気持のよいものであろう。ただ、鶺鴒やイベントを見ることができるようになると、真正面から発するその明かりが鶺鴒を邪魔し、鶺鴒をその場から見る者にも、遊歩道から見る者にも邪魔をするものとなる。さらに、長良川は狭い川であり、その明かりは十分に観覧船まで届くであろう。鶺鴒がやたらと明るいところで行われることとなり、風情も損なわれるであろう。

ウォーターフロント施設に、川沿いで風を感じながら楽しめる飲食施設があることは大変よいことではあるが、海に面するウォーターフロントとは趣を異にする。

素敵な遊歩道ができたのであるから「明かりは邪魔になる」との観点にたつ構想が必要ではないか。

4、「ごっつお棧敷」について

岐阜グランドホテルの12階の展望レストランからの景色が絶景であることから分かるように、長良川を眺めながらの展望レストランは素敵なものとなるはずである。

ただ、前長良川ホテルも展望レストランがあったはずである。ホテル経営としては成り立たず撤退した跡地に、巨額な投資をする施設の一部としての展望レストランは成り立つのであろうか。同じ轍を踏むのではないか。発想の違いを感じない。

ゆったりとした空間で美味しい食事をしたあと、腹ごなしを兼ねて長良川の遊歩道に出て、夜風に当たりながら鶺鴒を見物する。このコンセプトでよく、レストランから鶺鴒が見える必要性はそれほど大きくないのではないか。

私自身は、施設の正面は長良川の遊歩道より一本北側の道とし、遊歩道側は鶺鴒広場を綺麗に整備した芝生の庭とし、その庭には側面から出られるようにし、長良川岸の明かりは最低限にして、鶺鴒を楽しめるようにしたほうがよいと考えている。

もしくは建造物は長良川に面して建てるのではなく、長良川と垂直の方向に建てて、窓を極力なくし、光が直接、長良川に注がないようにするとよいと考えている。

また、潜龍や岐阜グランドホテルのレストランは、すべて高級料理店であり、若者達や一般家庭人が気軽に楽しむには如何にも値段が高すぎる。センスのよい店で、ある程度リーズナブルで食事を楽しめるお店が2、3件あってもよいのではないか。(居酒屋はリーズナブル過ぎる)

前述したが、そこで食事をしたあと、腹ごなしを兼ねて、長良川の遊歩道に出て、鵜飼を楽しむとのコンセプトでよいのではないか。

夏場は、岐阜公園も長良公園もイルミネーションでライトアップされる。多くのカップルや家族連れがそれを楽しみに集まる。それと同様に鵜飼を楽しみに集まる。そのような楽しみ方ができるようにするために遊歩道ができたのではないか。岐阜グランドホテルに通ずる道から自動車で跡地にもスムーズに入ることができるようになった。交通網は整備されている。

5、地下駐車場について

地下駐車場は建設資金が巨額となるので、必要ないと感じる。

ある程度広い敷地なのであるから、施設を縮小し、駐車場用地を確保した方が投資資金が格段に少なくなるし、地下駐車場は観光客には好まれない。

6、「川の市」について

岐阜は「道の駅」が多い。

道の駅には、地元の野菜や果物が豊富に売られており、随分賑わっている。ほとんどの道の駅は成功しているのではないか。私の知っている限りでは本巣市の「織部の里」は凄い人気である。

道の駅はその名称どおり、道の駅であり、広い道路沿いにあり、十分な駐車場を要しており、便利であり、野菜や果物の鮮度のよさも感じられる。また「織部の里」の敷地は15,000㎡であり、それだけでこの跡地(10,688㎡)の1.5倍である。

川の市は広い道沿いにあるわけでもなく、鮮度を感じさせる立地でもない。結局、観光客対象となるが、観光客が野菜や果物を果たして購入していくであろうか。

道の駅と同じ役割を担えるとは思えない。

7、街巡りステーション、工芸工房について

雨天のため鵜飼が中止になった場合、代わりに少しでも観光客に楽しんでもらう施設は必要であろうし、鵜飼が始まるまでの間、観光客に時間が潰せる施設が必要であろう。だからと言って、ハイビジョンシアター、鵜飼関連用具の展示等を行う「鵜会所」は必要であろうか。今まで、岐阜公園にある歴史博物館がその役割をある程度果たしてきたであろうし、今後の改良を加えれば、それ以上の機能を十二分に果たしていくのではないか。同じ様な施設は近くに幾つもない。

ただ、美濃市は和紙で、関市は刃物で、多治見は陶器で有名であるが、最初からそれらのまちを訪れる観光客は少ないであろうから、それらのまちを観光客に紹介し、観光客がさらに興味を持って、うだつのある町並み、幸兵衛窯まで足を延ばしてみたいと思う道を開くことは、情報発信基地としての役割を持つ県都である岐阜市の役割であると考えられる。

それを考えると、工芸工房、街巡りステーションは必要であると思われる。また、岐阜公園、川原町、遊歩道はそれぞれ離れていることから、巡回シャトルバスも必要と思われる。

ものづくりの発信基地は、アクティブGが担うはずであったと思うのであるが、そのコンセプトは相変わらず不明確であることを考えると、止むを得ないのかもしれない。

8、名古屋港イタリア村は、当初投資額は50億円であり、この基本構想とほぼ同じ投資額である。4月1日にオープンして5月25日で来場者100万人突破、この跡地構想の1年間の目標人数を2ヶ月弱で達成してしまっている。

名古屋港の倉庫の跡地を利用して、イタリアの町を再現し、ブランド品等の販売、イタリアの食材の販売、レストラン、フードコート、小さな川を作って、ゴンドラを運行する。

公的施設っぽいものはミュージアムぐらいであろうか。伝統も旧跡も関係なく、スクラップアンドビルドの施設である。そしてもっぱらショッピングと飲食を楽しむ施設である。しかし、この成功を真似ることはできない。

これと同じ様な構想を必要とする場合は、岐阜の近郊に幾つもある巨大アミューズメント施設に委ねられるべきであり、この跡地に委ねられるべきではない。

柳津のカラフルタウン 134,000 m²

木曾川のダイヤモンドシティ 95,200 m²

大垣ロックシティ 56,100 m²

各務原の金属団地の横にはダイヤモンドシティ以上の施設ができる予定でもある。

これらの施設はショッピングセンターと言うよりはエンターティメント施設であり、その大きさはこの跡地の敷地(10.688 m²)の比ではない。

ただ、イタリア村を見て来たあと、この長良川の遊歩道を再び歩いてみた。海と川との違いはあるが、ウォーターフロント開発であることは同じであり、味わいは全然違うが、この長良川と金華山の景色もまんざら捨てたものではないと感じたものである。

この遊歩道を歩く快適さは、他の観光地等を思い浮かべてもなかなか匹敵するものはない。私は県内外の人にあうと、この大変快適になったことを私は伝えている。この空間を是非大切にしてほしいと思うものである。

「岐阜市長良川ホテル跡地等施設整備基本構想」に書かれている資料等により他の施設と比較してみる。詳細は別紙を参照されたい。

なお滋賀県立琵琶湖博物館は研究施設でもあり、参考比較する施設ではないと考えている。

敷地1 m²当たりの投資額は滋賀県立琵琶湖博物館の542千円は別格としても、当施設は395千円であり、次に続くのは名古屋港イタリア村の167千円で半分にも満たない。土地を投資額を含まない施設としてその次に続くのは、伊豆丹波の酪農大国オラッチェの85千円で、さらに2分の1となる。

目標の百万人の来場者が達成できるとすると、観光客1人当たりの投資額は4千円であり、他の施設と比べると少ない金額となるが、百万人の来場者がある場合は、敷地1㎡当たりの観光客数は93人となり、イタリア村を除くと次に続くのは「ポケットファームどきどき」の20人であり、その5倍の密度の来場者を必要とする。その次に続くのは、広島三次ワイナリーの14人で9倍弱の密度の来場者を必要とする。

この施設が如何に高密度で突出した巨額な投資を求められているかがわかる。

つまり、この施設は、狭いスペースに如何に多くのことが求められ、それがためにその狭いスペースに全てを押し込もうとするがために、投資金額が巨額となり、それでありながら全てが中途半端なものになってしまっていると感じる。

求めるテーマを絞り、その上で施設等を考えていけば、投資金額も少なくなり、施設もそれなりに他に対抗できるものとなるのではないかと思う。

9、岐阜市は、交通網の整備等、行政としての役割を十二分に担っており、それも成功している。あとは、それを民間が如何に活かすかであろう。

長良川ホテルの跡地は、「財政収入の観点から最大限に有効利用せよ」が至上命令であるとしたら、高級マンション業者に売却することとなるであろうが、そうではなく、「市民にも観光客にも楽しんでもらえる施設を考えること」であれば、巨額な投資を前提とせず、更地の駐車場と情報発信基地としての簡易な施設と民間業者によるリーズナブルでちょっとリッチなレストラン等の設置をすることであろう。もし、この地が商業施設の立地として有効であると判断されれば、時とともに他にも民間業者が進出してくるであろう。

現在、アピの研修所(前長良川ハイツ)の横を下ったところには、洒落たお店が少しずつではあるができています。つまり民間業者はよいと思うところに進出してくるのであり、それらの判断は民間業者がするのであり、行政はその基盤を整備するだけで十分である。

JR熱田駅と名鉄神宮前駅との間の駅前商店街をタクシーで横切る。すべての店のシャッターが下りていることから、タクシーの運転手に聞く。

「今日は、熱田神宮はお休みで、そのために商店街もお休みなのかな。」

タクシーの運転手は答える。「いえいえ、全部、店じまいですよ。」

「再開発の話でもあるのかな。」

タクシーの運転手が答える。「私は聞いていませんが。」

私はただ唖然として、車窓からその光景を見送った。この光景を見ると関市の本町が活況で賑わっているようにすら思ってしまう惨状である。

町づくりがいたるところで行われている。

岐阜では、川原町、加納、伊奈波、美殿町等、皆、埋もれていた歴史的建造物等を磨き直してそれらを柱にして活性化を模索している。熱田駅前商店街は熱田神宮というとてもない現役の巨大で歴史的にも価値のある財産を有している。他の街の人達にとっては羨

ましい限りであろう。しかも日本で一番元気と言われる名古屋である。

宝の持ち腐れ。素晴らしい財産を十分活用しきれないのはその者たちの責任である。行政の責任は、大切な宝を、活用するすべも意欲もない者が握りこんでしまい、他の新規参入をしたいと願っている者の手に委ねられないような状態を作らないようにすることである。

「川越はなぜ凄い。」「近くに東京があるから。」

「岐阜はなぜ駄目か。」「近くに名古屋があるから。」

このような論理を平然と抱いている負け犬的な経営者に岐阜を委ねてはいけないのである。玉宮商店街の仕掛け人も名古屋人と聞いている。

岐阜市は宝の山である。